

藪越遺跡Ⅱ

2000年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市上郷地区は、飯田市街地の北に位置し、天竜川河岸から木曾山脈前山の麓までの東西に細長い範囲を占め、川沿いの平坦地から段丘面・扇状地等に比較的広い耕地が広がっています。そうした地形を活用して原始、古代における先祖の営みは、縄文、弥生、古墳、歴史時代にと枚挙にいとまがない程です。中でも古代社会においては律令の官道東山道の飯田松川渡河地点として、古代伊那郡衝の座光寺恒川遺跡へ通じる交通の要衝に位置づけられます。しかし、それらは地中に埋蔵されている特性の為発掘調査により解明するより術はございません。文化財に関する認識、技術は日進月歩であり、できる限り現状のまま後世に伝えることが望ましいわけですが、同時に私たちは今、現実社会に生きる人間としてよりよい社会や生活を求めていく権利も尊重すべきであり、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面する事が多くなっています。こうした事態に対して、発掘調査を実施して記録にとどめるという文化財保護の観点から次善の策を取らざるを得ない事も生じるわけです。

今回、藪越遺跡内に(株)しまむらから新店舗の計画が出されました。本遺跡は平成2年の調査で弥生時代から古墳時代にかけての集落の様子が明らかになった遺跡です。それゆえ、関係各方面との協議等の結果、工事実施に先立って緊急発掘調査を行い、記録保存を図ることになりました。

調査結果は本文で述べられているとおりですが、今回の調査で弥生時代後期の集落の様子がさらに明らかになりました。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた(株)しまむら、隣接地の方々をはじめ、本調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成12年3月

飯田市教育委員会
教育長 富田 泰啓

例 言

1. 本書は(株)しまむら店舗建設工事に先立って実施された、飯田市上郷飯沼「藪越遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、(株)しまむらからの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成10年度に現場作業、平成11年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・航空写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、YBNを一貫して用いた。
6. 本報告書では以下の遺構番号を使用している。竪穴住居址－SB、掘立柱建物址－ST、集石(炉)－SI、溝址－SD、土坑－SK、その他－SX
7. 本報告書の記載順は竪穴住居址を優先した。遺構図、遺物図版及び写真図版は 本文末に一括した。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
9. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ(単位cm)を表している。
10. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。
11. 本書の執筆と編集は山下誠一、渋谷恵美子の助言により、遺構については山下誠一、その他については坂井勇雄が執筆、編集を行った。
12. 本書に関連する出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目次

序		3) 溝址 (SD)	
		SD07~11	13
例言		4) 集石炉 (SI)	
		SI01	13
I 経過		5) 土坑 (SK)	
1. 調査に至るまでの経過	1	SK01~07	13
2. 調査の経過	1	6) 土層観察表	13
3. 調査組織	2		
4. 事務局	2		
II 遺跡の環境		IV まとめ	15
1. 自然環境	5		
2. 歴史環境	5		
III 調査結果		図版	17
1. 調査の方法と概要	8	写真図版	41
2. 基本層序	8	報告書抄録	59
3. 遺構と遺物	9		
1) 竪穴住居址 (SB)			
① SB10	9		
② SB11	9		
③ SB12	10		
④ SB13	10		
⑤ SB14	10		
⑥ SB15	11		
⑦ SB16	11		
⑧ SB17	12		
⑨ SB18	12		
⑩ SB19	12		
2) 掘立柱建物址 (ST)			
ST02~04	13		

1 経過

1. 調査に至るまでの経過

(株)しまむらは、飯田市上郷飯沼にある現店舗の北側に新店舗を建設することを計画した。当該地は上郷地区の埋蔵文化財包蔵地蔵越遺跡の北端部にあたり、平成2年度、当該遺跡において現店舗の建設に先立つ発掘調査を実施し、弥生時代・古墳時代の集落等が確認されており(上郷町教育委員会1991)、当該地も何らかの保護措置が必要と考えられた。そこで、平成10年4月7日に、長野県教育委員会文化財保護課・(株)しまむらの代理人の野田調査事務所・飯田市教育委員会博物館課の三者による保護協議を実施した。その結果、試掘調査を実施して、本調査の可否を判断することとした。

試掘調査は、平成10年5月6日に実施した。その結果、遺構・遺物が認められ、遺跡に影響が及ぶ建物部分を対象として本調査が必要と判断された。試掘が終了した平成10年5月から、本調査の時期と費用について(株)しまむら・飯田市教育委員会の二者で調整を進め、平成10年度に発掘調査、平成11年度に整理作業を実施し、発掘調査報告書を刊行することとなった。これを受け、平成10年5月19日付で発掘調査、平成11年4月1日付で整理作業のそれぞれ委託契約書を取り交わした。

2. 調査の経過

平成10年6月2～5日に重機による表土剥ぎを行い、6月9日から作業員を使って本調査を開始した。試掘調査で確認されていた竪穴住居址の他に掘立柱建物址・集石炉等が検出され、順次掘り下げの調査を進めた。並行して写真撮影・図面作成作業を行い、6月18日には北側調査区の調査を終了した。引き続き重機により南側調査区の表土剥ぎを行い、6月29日から作業員による調査を再開した。遺構掘り下げ及び写真撮影・図面作成作業を済ませ、7月14日には現地におけるすべての作業を終了した。その後、図面・写真等の整理を実施し、平成11年3月15日に実績報告書を提出した。

平成11年度は整理作業を実施した。委託契約締結後の5月から飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第2原因の作成・トレース・版組等を行い、原稿を執筆して本発掘調査報告書を作成した。

3. 調査組織

1) 調査

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長	小林恭之助(～H11.12)
	"	富田 泰啓(H11.12～)
調査担当者	山下 誠一(～平成10年度)	渋谷恵美子(平成11年度～)
	坂井 勇雄(平成11年度～)	
調査員	佐々木嘉和 吉川 豊(～平成10年度)	馬場 保之 吉川 金利
	福澤 好晃 下平 博行 伊藤 尚志	西山 克己(～平成10年度)
	藤原 直人(平成11年度～)	
作業員	新井ゆり子 池田 幸子 伊坪 節 大田 沢男 岡田 直人	
	岡田 紀子 金井 照子 唐沢古千代 北原 裕 木下 早苗	
	木下 玲子 熊谷 義章 小島 康夫 小平不二子 小林 千枝	
	佐藤知代子 瀬古 郁保 原 昭子 福沢 育子 福沢トシ子	
	古林登志子 正木実重子 牧内 八代 松下 省吾 松下 省三	
	松島 直美 三浦 厚子 宮内真理子 森藤美知子 柳沢 謙二	
	吉川紀美子 吉川 正実	

2) 指導

長野県教育委員会

3) 事務局

飯田市教育委員会博物館課

小畑伊之助 (博物館課長)

小林 正春 (" 埋蔵文化財係長)

吉川 豊 (" 埋蔵文化財係 ～平成10年度)

山下 誠一 (" " ～平成10年度)

馬場 保之 (" ")

吉川 金利 (" ")

福澤 好晃 (" ")

下平 博行 (" ")

伊藤 尚志 (" ")

渋谷恵美子 (" " 平成11年度～)

坂井 勇雄 (" " 平成11年度～)

西山 克己 ((財)長野県埋蔵文化財センターより出向 ～平成10年度)

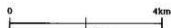
藤原 直人 ((財) " 平成11年度～)

牧内 功 (博物館課 庶務係)

松山登代子 (" " 平成11年度～)



挿図1 越越遺跡位置図





挿図2 蕨越遺跡調査位置図及び周辺図

II 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市上郷地区は飯田市北部、市街地の北東2kmに位置し、北東を飯田市座光寺、東は天竜川を挟んで下伊那郡喬木村、南を飯田市松尾地区、西を飯田市街地と接する。

飯田市は赤石山脈と木曾山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘がみられるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの五段階に編年されている。上郷地区の地形の特徴として地区の中央部を南北に横断する断層による大段丘があり、これを境として俗に上段と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱとがみられる。その段丘崖の比高差は約50mあり、前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍がある。低位段丘Ⅱ地帯は天竜川の現河床面海拔398mとの比高差30～3mを測り、大段丘崖下を中心に湧水や地下水が豊富である。そのため、かつての沼沢の窪地は、現在も典型的な水田地帯となっている。この段丘中央部を国道153号が、突端部を農免道路が南北に走行する。ちなみに、低位段丘Ⅱ地帯は三大別で、天竜川現河床よりやや上段の海拔398～405mの南条面、一段と高く海拔407～418mの別府面、さらにその上段の飯沼面に細別される。

葎越遺跡は飯田市上郷飯沼に所在し、低位段丘Ⅱ南条面および別府面の海拔415～420mに立地する。南側が比高差4～8mを測る栗沢川の浸食谷で、北側は緩やかに傾斜しながら窪地の湿地帯に連続している。北東側は北浦遺跡、西側は堀尻遺跡に接している。総体とすれば、北側に広がる広い湿地帯に面する微高地上に立地し、その地目は水田・畑・果樹園で、宅地化された箇所も多い。今次調査地は遺跡範囲の北端にあたり、北西側は西浦遺跡に接している。

本遺跡から松川との間は上郷地区でも密に遺跡が立地する箇所といえ、高屋遺跡・宮垣外遺跡・矢崎遺跡・別府中島遺跡など縄文時代以降連続的に生活空間として利用されてきたと考えられる。生産地や湧水などの生活条件に恵まれ、集落を営むのに絶好の自然環境といえる。

2. 歴史環境

上郷地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は縄文時代草創期までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

上郷地区最古の文化は、上段の姫宮遺跡や黒田大明神原遺跡出土の表裏縄文土器片と、おなじく柏原A遺跡出土の石器剥片により、縄文時代草創期からその黎明を知ることができる。次の縄文時代早期に

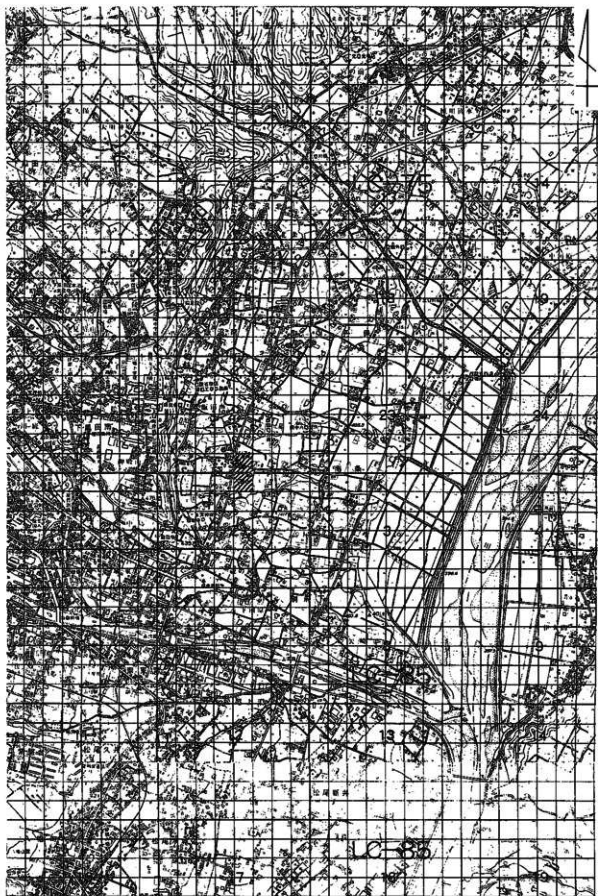
なると、前述の黒田大明神原遺跡や下段の西浦遺跡から押型文土器が出土した竪穴住居址が調査されている。縄文時代の前期の遺跡は、下段の矢崎遺跡や黒田大明神原遺跡から竪穴住居址が検出されており、居住域の拡大も想定される。縄文時代中期になると、下段の最下段の段丘面を除いた全域に遺物の分布が目立ち、人々の生活舞台の広がりを示している。調査された遺跡も黒田大明神原遺跡、平畑遺跡、増田・垣外遺跡、丹保遺跡など数多く上る。縄文時代後期は遺跡が極端に減少するが、上段の日影林遺跡からままとまった資料が得られている。縄文時代晩期の様相は不明の部分が多い。

弥生時代は水田による稲作を主体とする新文化であり、飯田・下伊那へは東海地方から東漸したものと考えられる。その始まるの時期として、矢崎遺跡から出土した条痕文土器は文化の波及を考える上で貴重な資料といえる。稲作が定着する中期には、丹保遺跡・堂垣外遺跡など下段の広い範囲に遺跡が拡大する。弥生時代後期になると上段の段丘面まで遺跡が拡大し、水田による稲作ばかりでなく、雑穀類の畑作が重要な位置を占めたと考えられる。調査された遺跡も多く、上段の高松原遺跡・垣外遺跡・原の城遺跡、下段の丹保遺跡・兼田遺跡などがある。なかでも、丹保遺跡は後期全般にわたる拠点的な大集落である。

古墳時代は集落域と墓域が区別される。上郷地区の古墳は円冢古墳を含めて35基で、その大部分は別府地籍の松川・野底川に近い台地端部に立地する。前方後円墳は4基あり、その中で溝口の塚古墳は平成8・9年度に発掘調査が実施され、二重の周溝と竪穴式石室と武具類などの副葬品が出土し、5世紀後半に位置づくと明らかとなった。古墳時代の集落は藪越遺跡などで一部が調査されており、墓域縁辺部に展開すると考えられる。

7世紀後半からの律令時代では、地区内全域に遺物は分布する。特に、下段の土曾川南岸に位置する堂垣外遺跡は古墳時代から平安時代までの集落で、遺物・遺構から伊那郡衙との強い結びつきが考えられる。また、矢崎遺跡では大規模な鍛冶遺構と大量のフィゴ羽口と鉄滓の検出により、その役割が注目されている。この下段地帯は伊那郡衙といわれる恒川遺跡群同一段丘面にあり、しかも古代条里制遺構の存在が地割りと地名から推測される地帯であり、古代史研究上注目すべき地域である。また、海拔410mラインは都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地である。この地方は『和明抄』、『伊呂波字類抄』などの文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末には近衛家の郡戸庄であった。

終わりに、藪越遺跡の発掘調査について簡単にふれておく。平成2年度に(株)しまむら店舗建設に先立ち発掘調査が実施され、上下2枚の生活面から弥生時代・古墳時代・中世の竪穴住居址9軒などを調査した。これを第一次調査とし、今次調査を第二次調査とする。



挿図3 基準メッシュ区画調査位置図



III 調査結果

1. 調査の方法と概要

用地内で調査廃土の処理の関係で、北側と南側の2回に分けて調査を実施した。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、(株)ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については『三尋石遺跡 三尋石(II)遺跡』(飯田市教育委員会1996)に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画は挿図3で示したようにLC75 22-44、LC85 2-4である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

竪穴住居址……………10軒

掘立柱建物址……………3棟

土 坑……………7基

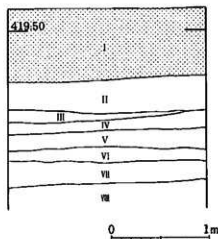
集 石 炉……………1基

穴・柱穴……………多数

2. 基本層序

SB19の西側、南に面する用地外壁面の層序を挿図で示した。

- 1層: 駐車場造成のための埋土
- 2層: 灰黄褐色 (10YR4/2 SL)、造成前の水田面
- 3層: 黒褐色 (10YR3/1 LS)
- 4層: 灰黄褐色 (10YR4/2 LS)
- 5層: 黒褐色 (10YR3/2 LS)
- 6層: 黒褐色 (10YR2/2 LS)
- 7層: 暗褐色 (10YR3/3 LS)
- 8層: にぶい黄褐色(10YR4/3 SL)



挿図4 基本層序

調査前は北側の現店舗用駐車場として利用されており、埋め立て造成されていた。かつ、その前は水田として使われていて、その造成によりさらに削平されていた。おおよそ第一次調査区の表土からは1m弱削られていると考えられた。よって、第一次調査で認められた古墳時代以降の生活面は削平されて残っていなかった。そこで、弥生時代の遺構検出面である8層上面で調査することとした。ただし、SB19は6・7層から掘り込んでいることが土層により確認され、6層上面が弥生時代の生活面であり、5層からは弥生時代以降の堆積と考えられる。

3. 遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

① SB10 (挿図6、第17図、図版1)

遺構 AA14を中心にして検出し、全体を調査した。4.6×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN36°Wを示す。壁高は43～27cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。北東壁は緩やかな壁面をなすが、遺構が埋没する段階で崩れたもので、壁面の土が覆土中に確認できた。覆土は自然埋没の状況を示す。床面上に薄く炭が確認され、特に細線で示した範囲に顕著に認められた。また、焼土が所々で床面よりやや浮いた位置で確認された。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・にぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土をハリ床とし、たたき状に堅くきわめて良好である。主柱穴はP1～P4で、P4上層には石が認められた。P5は北側に土手状縁部をもち底面に2個の穴があり、入口部と考えられる。P6も底面に穴が2個あり、入口部といえる。入口部から炉址にかけて穴が重複して並び、間仕切りと考えられる。その他の穴は、炉址と北西壁の間に多く認められた。P4東側の床面上に台石がある。炉址は北西側主柱穴中間やや内側にある炉縁石を有する土器敷炉で、床面を58×44cmの楕円形に掘り窪め、甕の胴部片を敷く。断ち割り調査により土器の下に穴が確認され、土層により埋めてあると考えられた。土器埋設炉であった旧炉址の跡と考えられる。炉址や入口部・間仕切りの状況により、建て替えられており、規模・主軸・主柱穴・床面レベルなどあまり変わっていないといえる。

遺物 遺物の出土状態は、覆土中を主体として特別な集中箇所はないが、南隅の床面上から甕、入口部から有孔磨製石包丁・抉入打製石包丁などが出土した。

時期は出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

② SB11 (挿図7、第27図、図版1)

遺構 BV20を中心にして検出し、全体を調査した。3.7×3.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN54°Wを示す。壁高は21～13cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。覆土は一層を確認したのみである。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・にぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅くきわめて良好である。主柱穴結んだ内側が特に良好な床面であった。主柱穴はP1～P4で、P1には台石状の石で蓋をされていた。南東壁下東隅よりあるP5・P6は、入口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間と北東側主柱穴中間やや内側の2箇所を確認された。北西側のものは、床面を直径39cmの円形に掘り窪めた痕跡が確認され、土器埋設炉を抜き取ったものと判断された。北東側のものは床面を直径39cmの円形に掘り窪め、甕の胴部を埋めた土器埋設炉で、甕の一部を抜き取った跡埋め戻してあることが確認された。旧炉址といえる。そこから南西壁にかけて直線的に並ぶP7～P9は、旧住居址の間仕切りと考えられる。ハリ床下を掘り下げ調査すると掘り方が確認でき、3.1×3.3mのゆがんだ隅丸方形を呈する。床面は確認されず、北東・南東壁面際が深くなる。旧住居址に伴うと考えられる。以上の状況からみれば、旧住居址からほぼ90°方向を変えて建て替えられている。旧住居址主軸方向はN36°Eを測り、床面レベルはほぼ同じといえる。

遺物 遺物の出土量は少なく、特別な集中箇所はない。

時期は出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

③ SB12 (擇図11、第2図、図版2)

遺構 AC12を中心にして検出し、西側が用地外で、東隅と北東・南東壁の一部を調査した。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居である。壁高は30～25cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・ぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅くきわめて良好である。調査範囲が限定されて、役割が特定できた穴はない。

遺物 遺物の出土量は少なく、特別な集中箇所はない。

時期は出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

④ SB13 (擇図8、第3,4,7図、図版2)

遺構 BS19を中心にして検出し、全体を調査した。4.2×4.3mのゆがんだ隅丸方形の竪穴住居で、主軸方向はN39°Wを示す。壁高は33～25cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。覆土は基本的に一層で、床面直上に細かい炭が混じる。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・ぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅くきわめて良好である。主柱穴はP1～P4で、P1・P3は掘り方の途中で段をもつ。南東壁下中央にあるP5は、底面に小穴をともない入口部と考えられる。P8・P9は入口部から炉址に直線的に並び、間仕切りと考えられる。浅く窪むP16は、旧住居の主柱穴部分のため軟らかかったため、床面が沈んだものと判断された。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉緑石を有する土器埋設炉で、床面を直径47×45cmの円形に掘り窪め、口縁部の一部を欠く甕を埋める。甕内部底付近の土には細かな炭が多量に混じる。ハリ床下に壁面と床面が認められ、旧住居の存在が確認された。旧住居は3.7×4.2mのゆがんだ隅丸方形を呈し、主軸方向はN33°Wを測る。壁高は新住居の床面から14～4cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好で、点線で示した内側が特に堅く良好であった。主柱穴はP1～P4で、P5は入口部と考えられる。P6・P7は間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間にある土器埋設炉で、新旧2つが確認された。新炉址は床面を26×25cmの不整円形に掘り窪め、甕の胴部を埋める。旧炉址は床面を33×35cmの円形に掘り窪め、甕の胴部から底部を埋め、別個体の甕の破片を内側に入れて二重としている。いずれの炉址も、北西側に焼土・炭、甕内部の底付近には炭が多量に確認された。遺構の状況から、やや規模を大きくして建て替えられており、さらに旧住居も一回建て直されていることも想定される。

遺物 出土遺物は少なく、特別な集中箇所は認められなかった。

時期は、出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

⑤ SB14 (擇図6、第4,8図、図版3)

遺構 BV17を中心にして検出し、全体を調査した。SK06に北西壁の一部を切られる。4.6×4.7mの隅丸方形の竪穴住居で、主軸方向はN43°Wを示す。壁高は32～21cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。覆土はレンズ状の堆積をなし、自然埋没したと考えられる。床面は壁面から20～10cmを除いた全面が暗褐色(10YR3/3 SL)・ぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅くきわめて良好であり、点線で示した内側が特に堅く良好であった。主柱穴はP1～P4で、南東壁下南隅寄りにあるP5は、2個の小穴をともない入口部と考えられる。P6・P7・P8は入口部から炉址に

直線的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉緑石を有する土器埋設炉で、床面を62×48cmの不整形に掘り窪め、口縁部から胴上部を欠く甕を埋める。炉址北西側の細線で示した範囲に炭が広がり、甕内部底付近の土には炭が多量に混じる。ハリ床下の掘り下げ調査を実施したが、床面や掘り方は確認されなかった。

遺物 出土遺物は覆土中から出土し、特別な集中箇所は認められなかった。

時期は遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

⑥ SB15 (挿図9、第28回、図版3)

遺構 BR14を中心にして検出し、全体を調査した。4.4×4.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN57°Wを示す。壁高は30～17cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。東隅付近の壁下に周溝が認められ、幅16～12cm・深さ10～6cmを測る。覆土は一層である。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・にぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅くきわめて良好であった。主柱穴はP1～P4で、南東壁下東隅寄りにある土手状縁部を伴うP5は、底面が2個の穴となり、入口部と考えられる。P6・P7は入口部から炉址に直線的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉緑石を有する土器埋設炉で、床面を55×59cmの不整形に掘り窪め、ほぼ完形の甕を埋める。甕の外側と西側に焼土が認められた。ハリ床下に壁面と床面が認められ、旧住居址の存在が確認された。旧住居址は3.7×3.8mのゆがんだ隅丸方形を呈し、主軸方向は新住居址とほぼ同一と考えられる。壁高は新住居址の床面から12～5cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好で、点線で示した内側が特に堅く良好であった。主柱穴は新住居址と同一位置で確認されず、P1・P2は間仕切りと考えられる。炉址は新住居址と同一位置と考えられ、確認されなかった。遺構の状況から、やや規模を大きくして建て替えられている。

遺物 出土遺物は主に覆土中から出土し、特別な集中箇所は認められなかった。

時期は、出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

⑦ SB16 (挿図10、第58回、図版4)

遺構 BU11を中心にして検出し、全体を調査した。平安時代のSD11に切られる。5.0×5.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN47°Wを示す。壁高は35～17cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・にぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅く良好であった。ただし、地下水位が高くて水分の多い土が床面となっており、他の住居址の床面に比べるとやや軟弱である。主柱穴はP1～P4で、南東壁下東隅寄りにあるP5は、入口部と考えられる。P7・P8・P9は入口部から炉址に直線的に並び、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する地床炉で、床面を100×56cmの不整形円形に掘り窪める。焼土・炭はほとんど認められず、炉址と断定はできない。ハリ床下に壁面と床面が認められ、旧住居址の存在が確認された。旧住居址は4.6×5.0mの隅丸方形を呈し、主軸方向は新住居址とほぼ同一と考えられる。壁高は新住居址の床面から14～6cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が南西・南東壁下に認められ、幅16～8cm・深さ4～2cmを測り、断面はV字形をなす。床面は軟らかいが、点線で示した範囲の内側は

たたき状に堅く良好であった。主柱穴は新住居址と同一位置で確認されず、P5は入口部、P6・P7は間仕切りと考えられる。その他の穴は、北西壁際に6個直線的に並ぶ。遺構の状況から、やや規模を大きくして建て替えられている。

遺物 出土遺物は主に覆土中から出土し、特別な集中箇所は認められなかった。

時期は、出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

⑧ SB17 (挿図11、第2図、図版4)

遺構 BQ21を中心にして検出し、南東側が用地外で、北隅と北西壁の一部を調査した。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は20～15cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・にぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅く良好である。ハリ床下に壁面・床面が認められ、旧住居址の存在が確認された。壁高は新住居址の床面から14～9cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。調査範囲が限定されて、役割が特定できた穴はないが、2個の穴は新住居址に付属する可能性が高い。遺構の状況から、やや規模を大きくして建て替えられている。

遺物 遺物は床面上からわずかに出土した。

時期は、出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

⑨ SB18 (挿図11、第6図、図版5)

遺構 BS10を中心にして検出し、南西側が用地外で、北東壁の一部を調査した。平安時代のSD11に切られる。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は35～29cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は暗褐色(10YR3/3 SL)・にぶい黄褐色(10YR5/4 SL)の土を用いてハリ床とし、平坦でたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1と考えられる。ハリ床下に壁面・床面が認められ、旧住居址の存在が確認された。壁高は新住居址の床面から16～13cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。遺構の状況から、やや規模を大きくして建て替えられている。

遺物 遺物は覆土中からわずかに出土した。

時期は、出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

⑩ SB19 (挿図11、図版5)

遺構 南壁の土層調査中に基本土層6層の黒褐色(10YR2/2 SL)を切る落ち込みが確認され、南側に拡張して北西壁の一部を確認し、竪穴住居址であることが判明した。弥生時代後期のSB13に切られる。隅丸方形と考えられる竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は22～17cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はほとんど残っていないが、拡張部分ではたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1～P4で、P2はSB13のハリ床下で確認した。

遺物 遺物は床面上からわずかに出土した。

時期は、出土遺物、遺構形態より弥生時代後期に想定される。

掘立柱建物址(ST)

遺構名	図No.	検出位置	規模(梁行×桁行×深)m	柱間	(梁行×桁行)	主軸	柱廻り方	重複	時代
2	12	AF21	3.6×1.8×0.14~0.2	2×3間	梁行 1.8 桁行 1.8	N25° E	20~28cm 円形 楕円形		弥生(後)
3	12	BX21	3.6×3.8×0.04~0.33	2×3間	梁行 1.6~2.0 桁行 1.0~1.4	N45° W	20~40cm 円形 楕円形		弥生(後)
4	12	AG17	3.6×3.8×0.04~0.33		1.0・1.2・1.5・ 1.9	N15° W	24~52cm 円形 楕円形	SD9に 切られる	弥生(後)

溝 址(SD)

遺構No.	図No.	検出位置	規模(長×幅×深)cm	断面	主軸	重複	時代	出土遺物
7	13	AF17~AC23	1310以上×16~34×2~6	逆台形	N63° W		弥生(後)	
8	13	BY21~AB21	(北西)330以上×8~12×4~10 (南西)250以上×8~12×2~6	逆台形	N52° E N36° W		弥生(後)	
9	13	AC14~AH14	1100以上×450~640×					
10	13	BR20~BV22	920以上×12~30×7~20	逆台形	N31° E		弥生(後)	
11	13	BS10~BW10	400以上× ×37			SB16,18切る	平安	

土 坑(SK)

遺構No.	図No.	検出位置	規模 cm	重複	時代・時期	出土遺物
1	14	BW20,21	88×76×10.62		縄文後期初頭	深鉢
2	14	BX18	120×90×27			
3	14	AA19,20	94×52×12			
4	14	AA20,21	76×50×15			
5	14	AA17,18	58×52×17			
6	14	BW16	130×132×	SB14を切る		
7	14	BU19	162×114×33			

集石炉(SI)

遺構No.	図No.	検出位置	規模 cm	断面	形	重複	時代・時期	出土遺物
1	14	AD17,18	130×130×52	逆台形	楕円形		縄文	

土層観察表(1)

遺構名	層	JIS標準色標	土壌色	土性	備 考
SD7		10YR3/2	黒褐色	SL	
SD8		10YR3/2	黒褐色	SL	
SD10		10YR3/2	黒褐色	SL	
SD11		2.5Y3/2	黒褐色	LS	
SI1					上層に5~16cmの石、炭化物多量
SK1		10YR3/2	黒褐色	SL	
SK2		10YR3/2	黒褐色	SL	
SK3		10YR4/2	灰黄褐色	SL	
SK4		10YR4/2	灰黄褐色	SL	
SK5		10YR3/2	黒褐色	SL	
SK6		2.5Y3/2	黒褐色	CL	
SK7		2.5Y3/2	黒褐色	CL	

土層観察表(2)

遺構名	層	JIS標準色標	土壌色	土性	備 考
SB10	1	10YR3/2	黒褐色	SIL	
	2	10YR3/2	黒褐色	SIL	にぶい黄褐色(10YR5/2 LS)が混じる
	3	10YR5/2	にぶい黄褐色	LS	
	4	10YR3/2	黒褐色	SIL	にぶい黄褐色(10YR4/3 SL)が混じる
	5	10YR3/2	黒褐色	SIL	わずかに炭が混じる
	6				焼土
	7	10YR5/4	にぶい黄褐色	SL	炭が混じる
SB11	1	10YR3/2	黒褐色	SL	
	2	10YR3/2	黒褐色	SL	炭、焼土が混じる
	3	10YR3/2	黒褐色	SL	にぶい黄褐色(10YR5/2 LS)が混じる
SB12	1	10YR4/2	灰黄褐色	SL	
	2	10YR4/2	灰黄褐色	SL	鉄分が沈殿する
	3	10YR4/2	灰黄褐色	LS	
	4	10YR5/2	灰黄褐色	LS	
	5	10YR3/3	暗褐色	LS	
	6	10YR5/2	暗褐色	LS	にぶい黄褐色(10YR5/2 SL)が混じる
	7	10YR3/2	黒褐色	LS	
	8	10YR3/2	黒褐色	LS	にぶい黄褐色(10YR5/2 SL)が混じる
SB13	1	10YR3/2	黒褐色	SL	
	2	10YR3/2	黒褐色	SL	細かい炭が混じる
	3	10YR3/2	黒褐色	SL	灰黄褐色(10YR5/2 LS)が混じる
	4	10YR3/2	黒褐色	SL	焼土、炭が混じる
	5	10YR3/2	黒褐色	SL	細かい炭が多量に混じる
	6	10YR3/2	黒褐色	SL	にぶい黄褐色(10YR5/4 SL)、 灰黄褐色(10YR5/2 LS)が混じる
	7				炭に黒褐色(10YR3/2 SL)が混じる
	8				焼土
	9	10YR3/2	黒褐色	SL	灰黄褐色(10YR5/2 LS)、焼土が混じる
	10	10YR5/2	灰黄褐色	LS	
SB14	1	2.5Y3/2	黒褐色	LS	
	2	2.5Y3/2	黒褐色	LS	にぶい黄褐色(10YR5/2 LS)が混じる
	3	10YR3/2	黒褐色	LS	黒褐色(2.5Y3/2 LS)が混じる
	4	10YR3/2	黒褐色	SL	
	5	10YR3/2	黒褐色	SL	炭が混じる
	6				炭に黒褐色(10YR3/2 SL)が混じる
	7	10YR3/2	黒褐色	SL	焼土、炭が混じる
	8				炭
SB15	1	10YR3/2	黒褐色	SL	
	2	10YR3/2	黒褐色	SL	わずかに炭が混じる
	3				焼土
	4	10YR2/3	黒褐色	SL	
	5	10YR5/4	にぶい黄褐色	SL	黒褐色(10YR3/2 SL)が混じる
	6	10YR5/2	灰黄褐色	LS	黒褐色(10YR2/3 SL)が混じる
SB16	1	2.5Y3/2	黒褐色	LS	
	2	2.5Y3/2	黒褐色	LS	にぶい黄褐色(10YR5/2 LS)が混じる
	3	10YR3/2	黒褐色	SL	黒褐色(2.5Y2/2 LS)が混じる
	4	10YR3/2	黒褐色	SL	

IV まとめ

今次調査によって検出された遺構・遺物はすでに述べられてきたとおりである。時間等の制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果・問題点を時期毎に指摘してまとめとしたい。

(1) 縄文時代

該期の遺構について明らかなのは集石炉01と土坑01のみであり、土坑01より縄文時代後期に想定される深鉢が出土している。その他、縄文時代中期から後期にかけての土器片が住居址、溝址の覆土内から流れ込み遺物として出土しており、当調査地を含め、周辺地域に該期の集落が存在していた可能性は高いと言え、今後の周辺地域における調査の成果を待ちたい。

(2) 弥生時代

該期にあたる遺構は竪穴住居址10軒、掘立柱建物址3棟等が確認されており、本遺跡を代表する時代である。時代の主体は後期後半から終末であり、出土遺物の様相(山下1992)から以下の如く5時期に分けられる。

- 第1期 SB19
- 第2期 SB14
- 第3期 SB13 SB15
- 第4期 SB16
- 第5期 SB10 SB11 SB18
- 不明 SB12 SB17

第1期の19号住居址については受口壺の口縁部が出土しており、様相から後期初頭に想定され、第2期の14号住居址以下が喪嗣部の施文内容の変遷により後期後半から終末に想定される。今回の調査においては、確認された住居址のほとんどが第2期から第5期の後期後半から終末にかけての住居址であり、該期の集落の一端を明らかにした点が成果である。隣接地で行われた第1次調査(上郷町教育委員会1991)においても後期前半の住居址が1軒、後期後半の住居址が4軒確認されており、この事と合わせて考えても当調査区を含む周辺地域にかけて拠点集落とも言える大きな集落が存在した可能性が高いと言える。

この集落については、上記のような遺物の様相からの時期差、確認された住居址の近接する位置関係などの点からも一時期の集落ではない事は明らかであり、長期間にわたって集落が営まれた事が予想される。この事は上段の段丘面上に立地する垣外遺跡(上郷町教育委員会1989)、高松原遺跡(飯田高等学校1977・上郷町教育委員会1984)等の集落が比較的短期間で断絶するのとは異なる様相であり、下段段丘上に立地する集落の特徴を示している。この長期的な集落の継続の背景には当遺跡北側に広がる湿地帯を利用

した水田耕作地の存在が考えられ、豊かな食料生産が集落の存続を支えたのではないだろうか。

(3) 古墳時代以降

該期の遺構は平安時代と思われる11号溝址のみである。今回の調査区では第1次調査で認められた古墳時代以降の生活面が造成による削平をうけている為遺構は確認出来なかった。

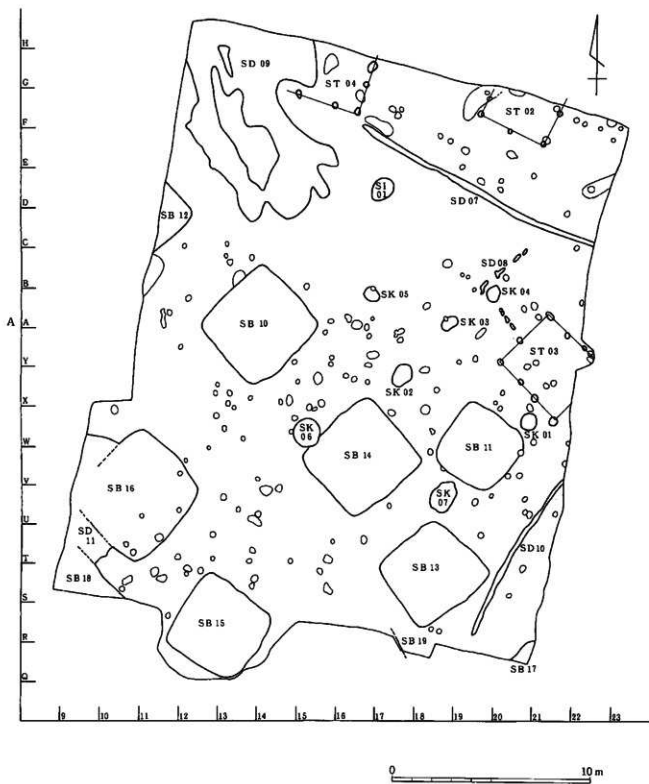
隣接地で行われた第1次調査では中世の住居址1軒、古墳時代後期の住居址3軒が確認されており、該期の集落が存在する可能性は高い。

2度にわたる調査で、弥生時代後期の拠点集落としての様相を把握出来た事は大きな成果である。しかし、住居址周辺に存在する他の遺構等についてはまだまだ検討が必要であり、今後に生かしていきたい。

最後に、埋蔵文化財の保護に深い理解をされた(株)しまむらには厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

飯田高等学校	1977	『高松原』
上郷町教育委員会	1984	『高松原Ⅱ』
上郷町教育委員会	1986	『南条棚田遺跡Ⅰ』
上郷町教育委員会	1987	『南条棚田遺跡Ⅱ』
上郷町教育委員会	1989	『カサシ・ミカト・増田・垣外遺跡』
上郷町教育委員会	1991	『藪越遺跡』
山下 誠一	1992	「飯田・下伊那の後期弥生土器」『長野県考古学会誌』65・66



押図5 蕨越遺跡全体図

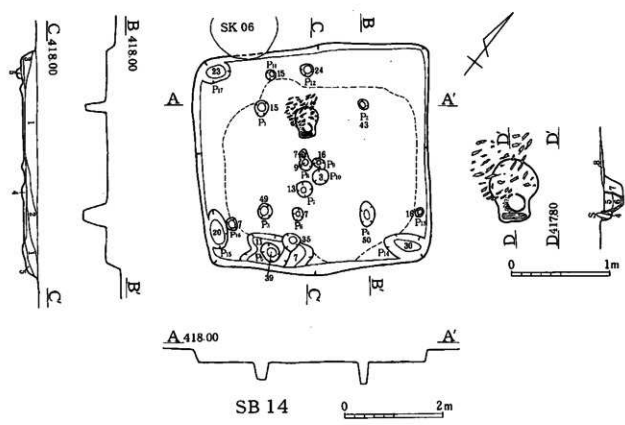
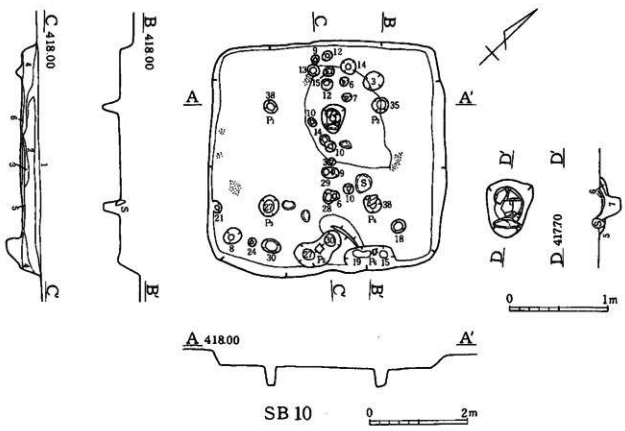
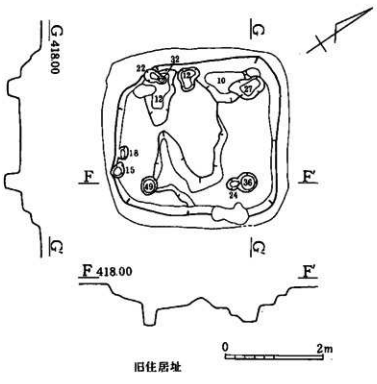
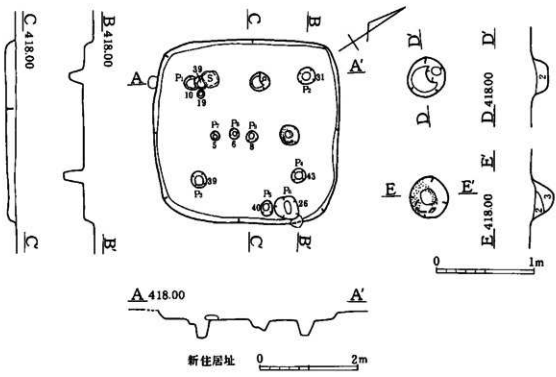
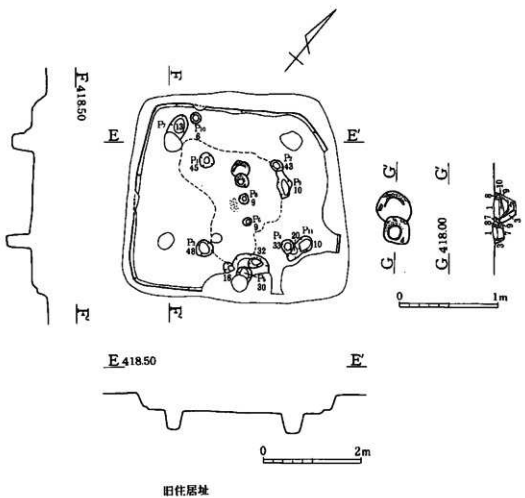
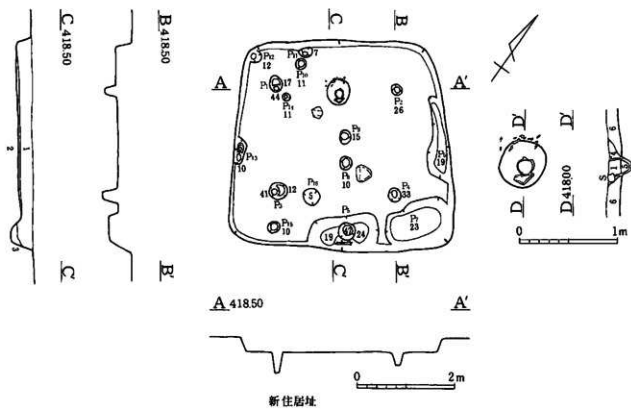


插图 6 SB10 SB14



挿図7 SB11



挿図8 SB13

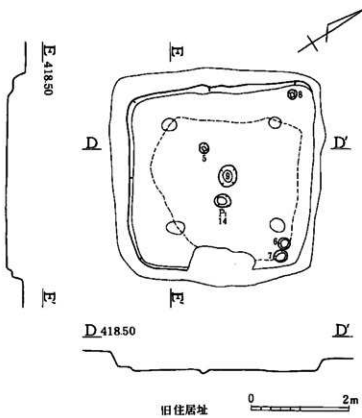
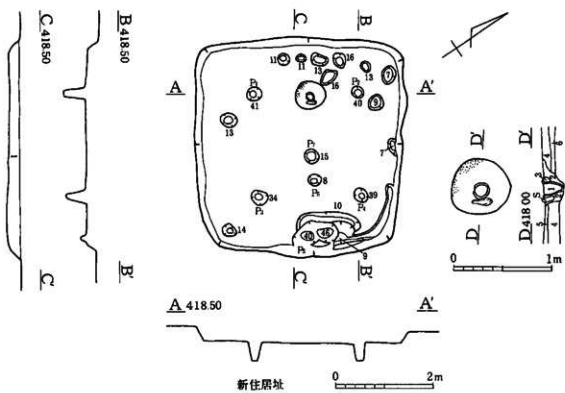
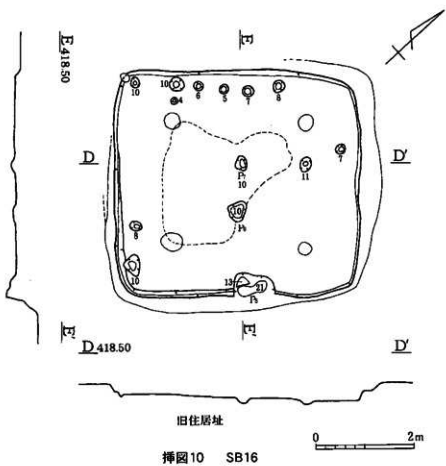
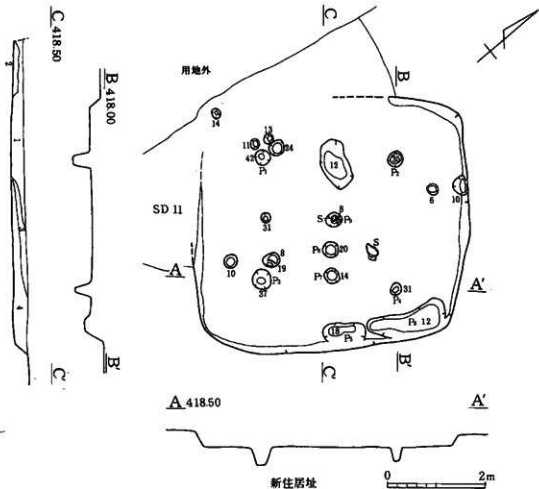
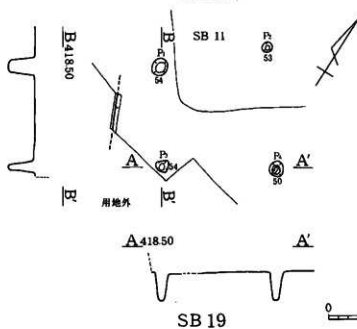
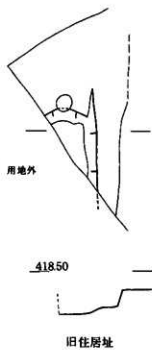
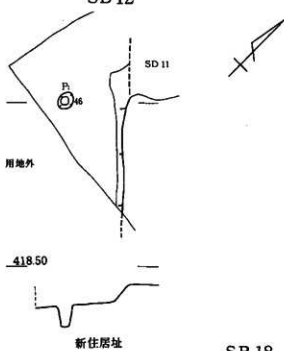
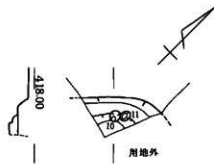
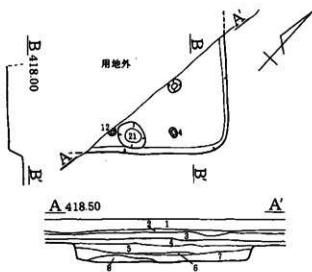


插图9 SB15

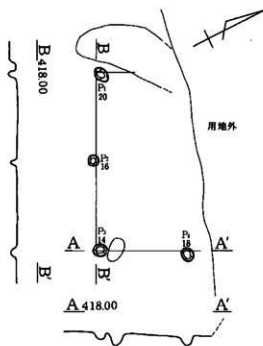


挿図10 SB16

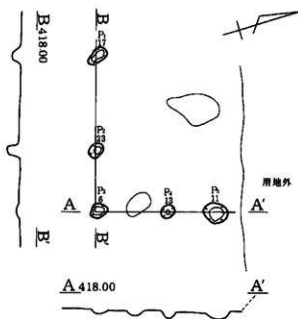


0 2m

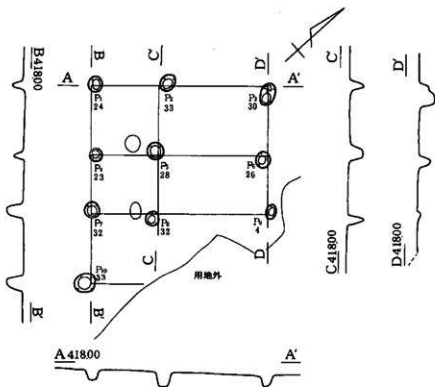
挿図11 SB12・17~19



ST 02



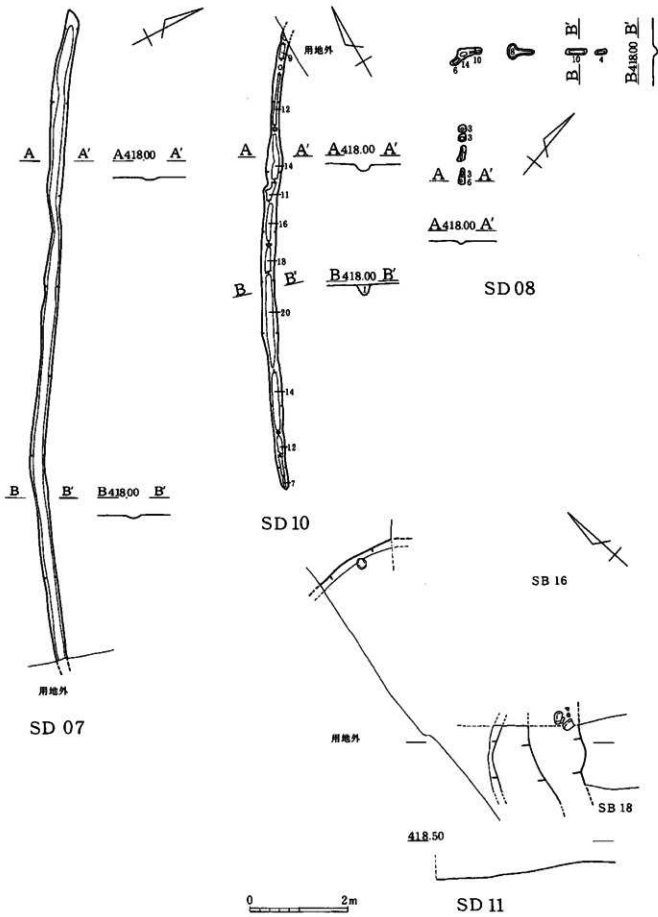
ST 04



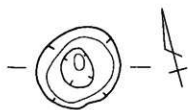
ST 03



挿図12 ST02 ST03 ST04



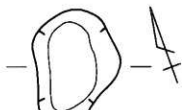
挿圖13 SD07・08・10 SD11



418.00



SK 01



418.00



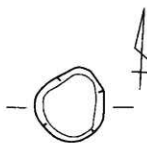
SK 02



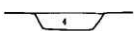
418.00



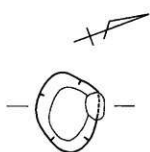
SK 03



418.00



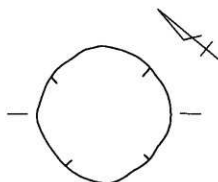
SK 04



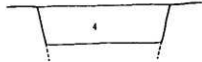
418.00



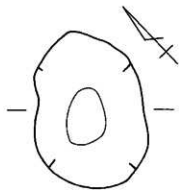
SK 05



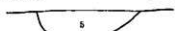
418.00



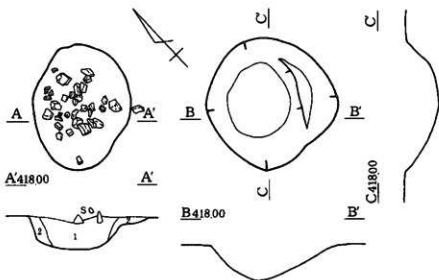
SK 06



418.00



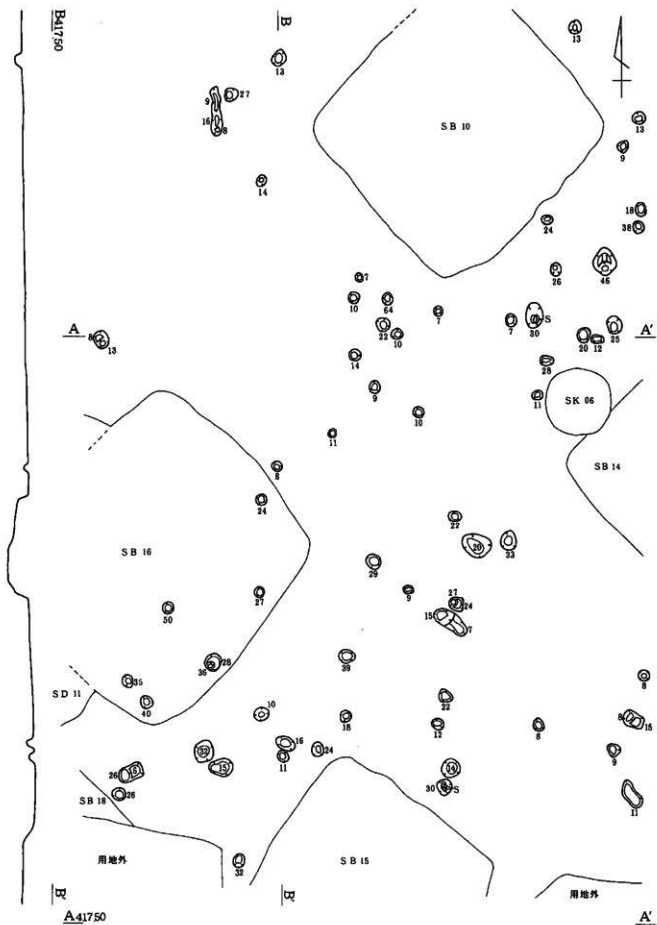
SK 07



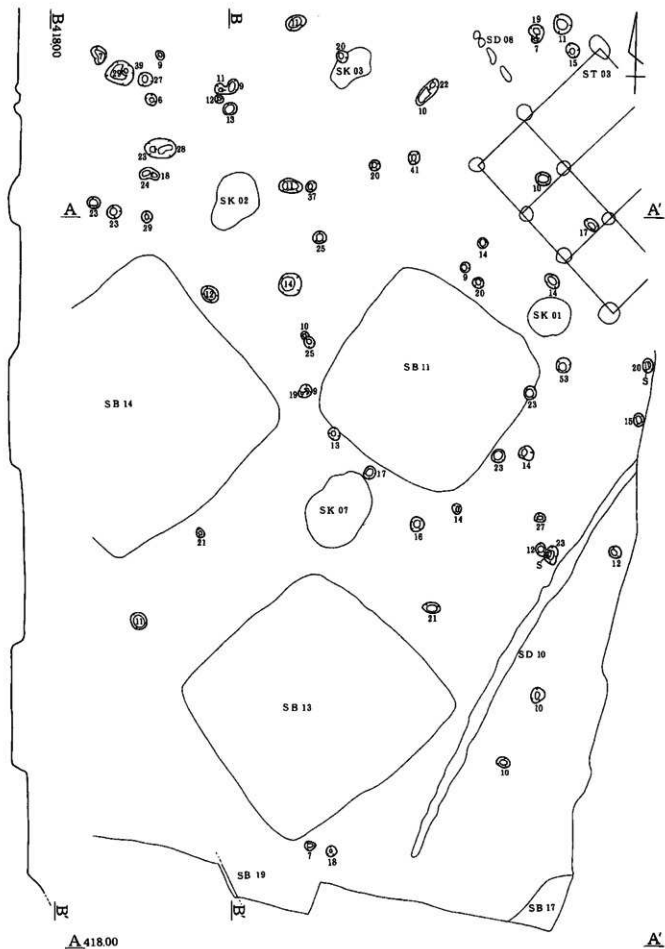
SI 01

0 1m

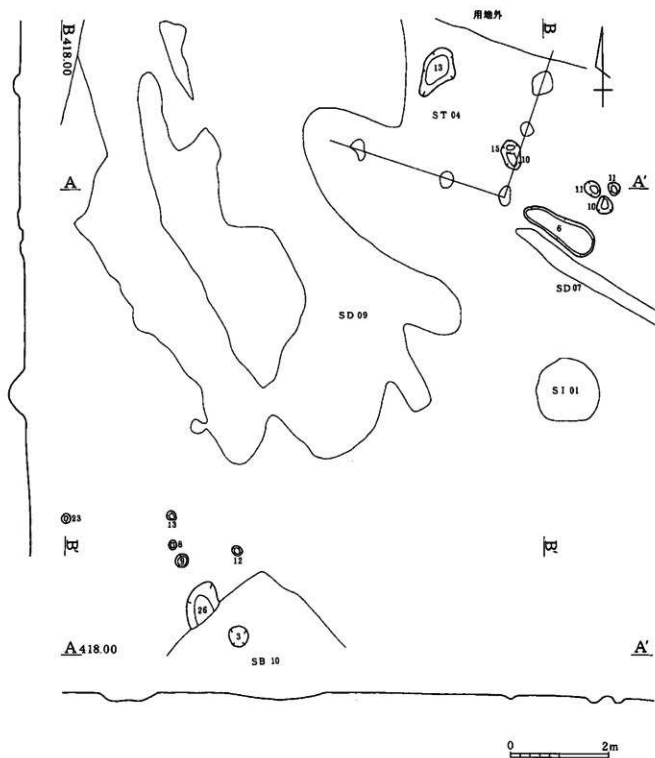
挿図14 SK01~07 SI01



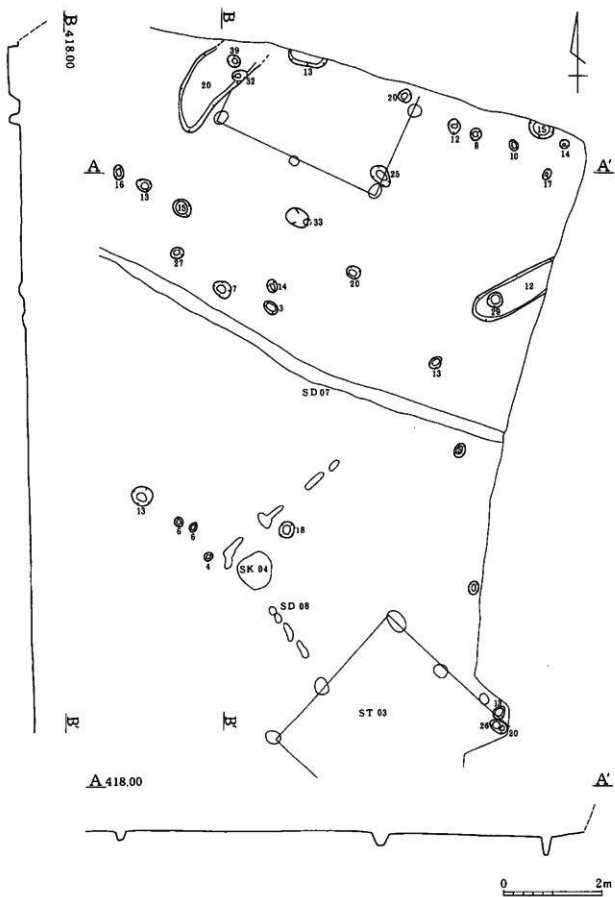
挿図15 柱穴 (1)



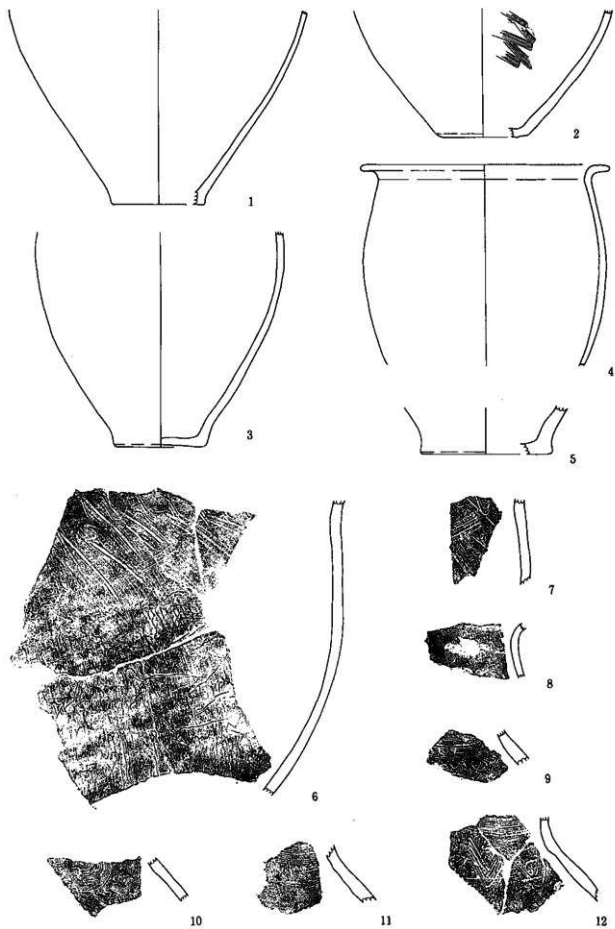
挿図16 柱穴 (2)



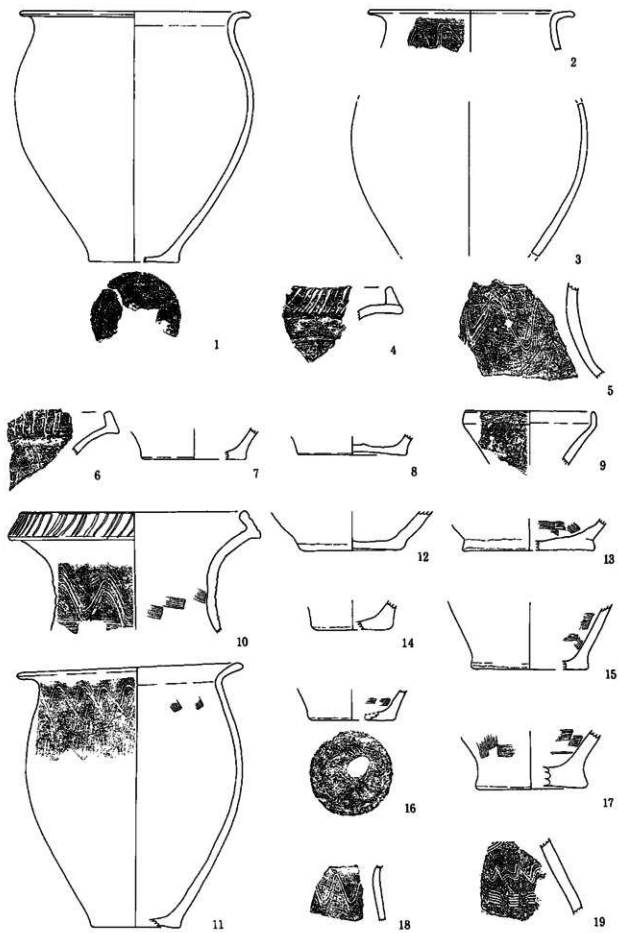
挿圖17 柱穴(3)



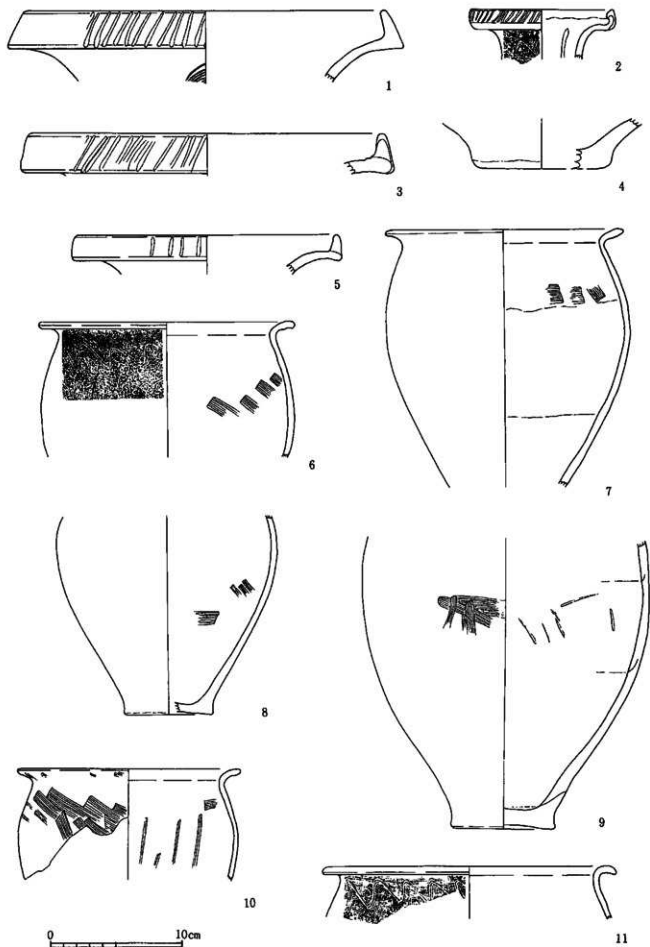
挿圖18 柱穴(4)



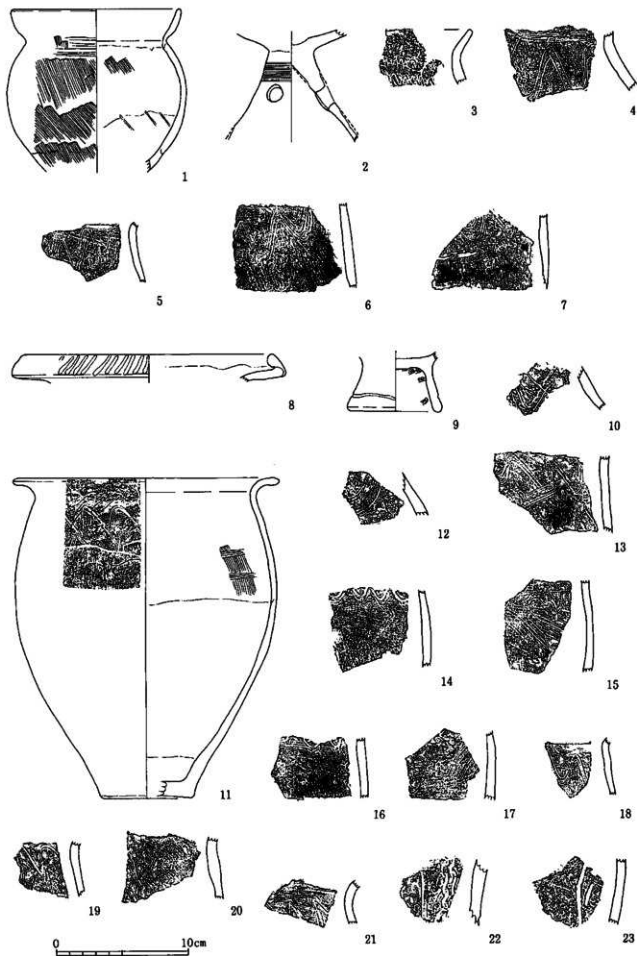
第1圖 SB10



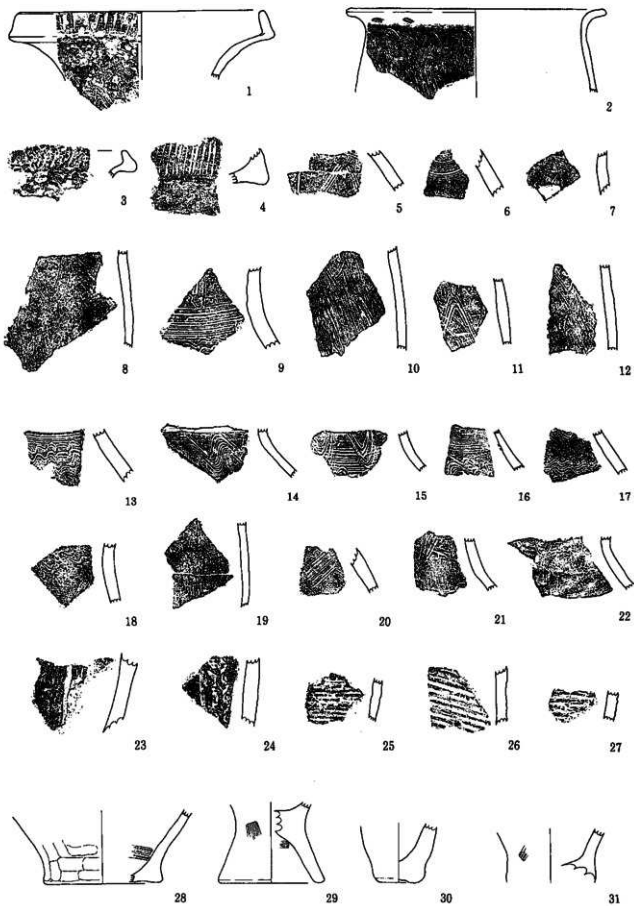
第2圖 1~5 SB11 6~7 SB12 8 SB17 9 SB19 10~19 SB15



第3图 1~11 SB13

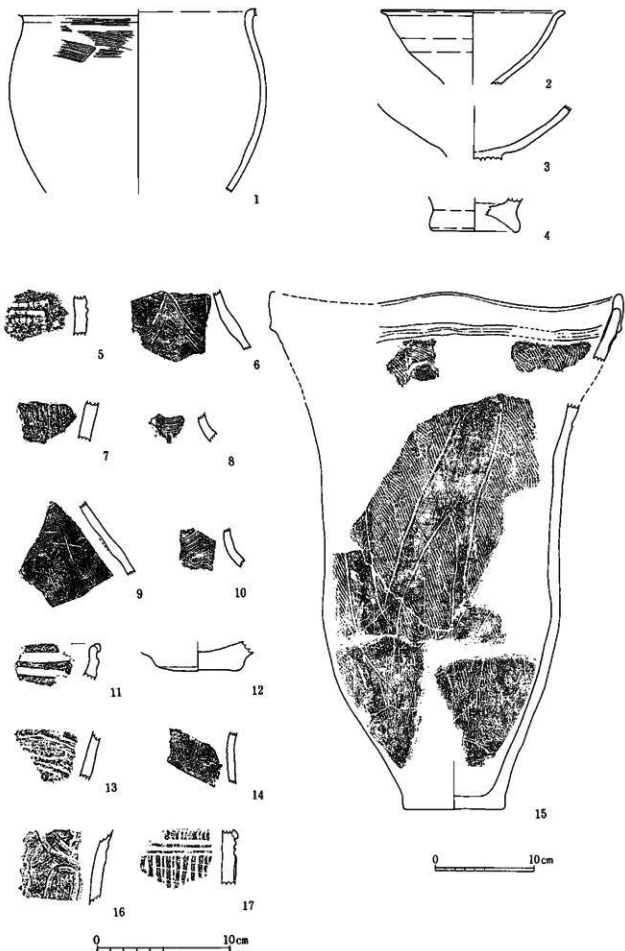


第4图 1~7 SB13 8~23 SB14

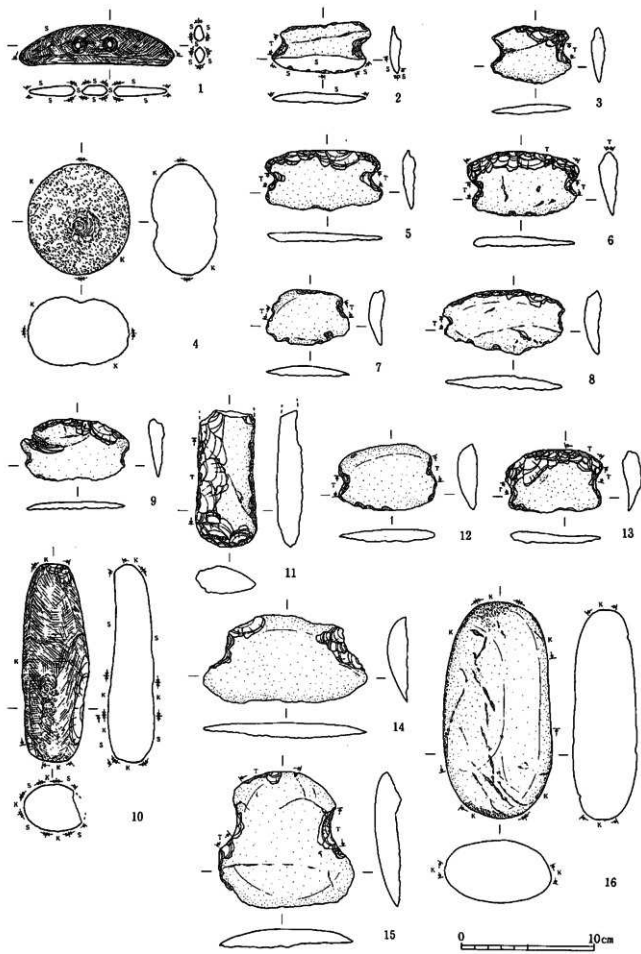


第5図 1~31 SB16

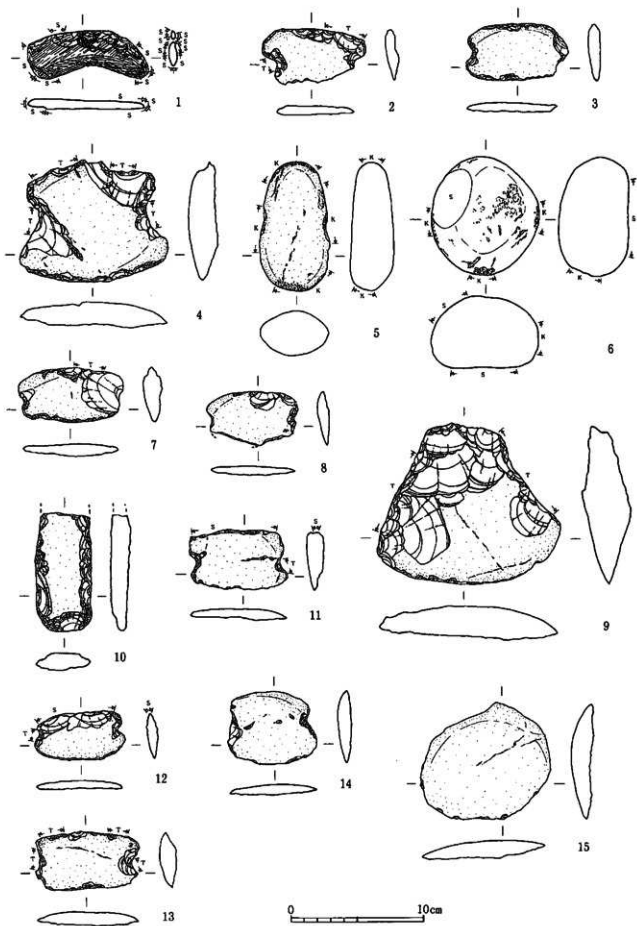
0 10cm



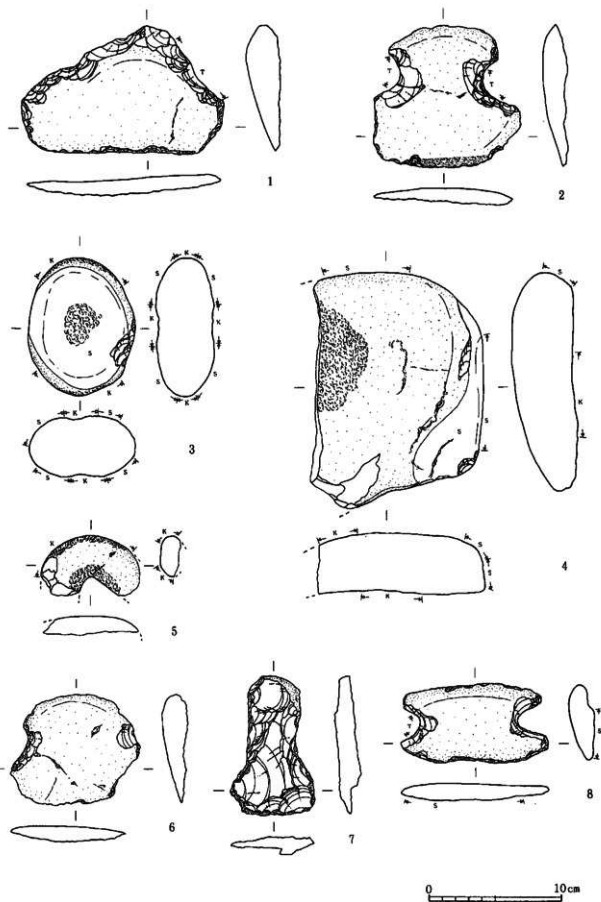
第6圖 1~4 SB18 5~6 SD7 7~8 SD9 9~10 SD10 11~14 SD11 15 SK01 16~17 遺構外



第7圖 出土遺物 1~4 SB10 5~10 SB11 11~16 SB13



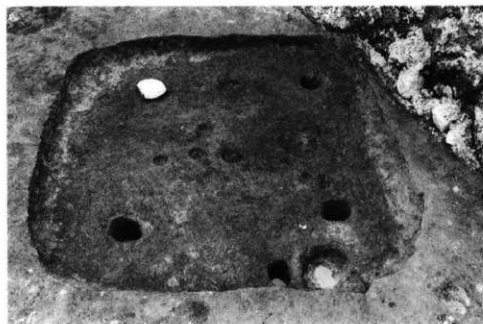
第8圖 出土遺物 1~6 SB14 7~9 SB15 10~15 SB16



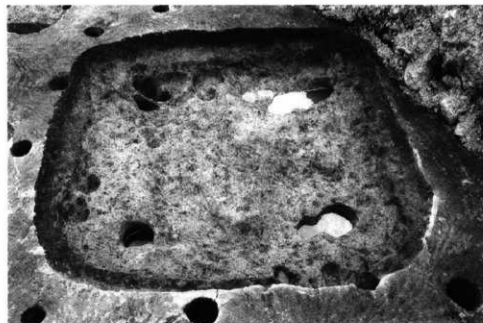
第9圖 出土遺物 1~5 SB16 6 SD11 7,8 遺構外



SB 10



SB 11 (新)



SB 11 (旧)



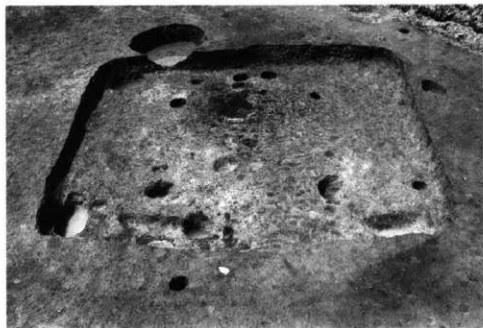
SB 12



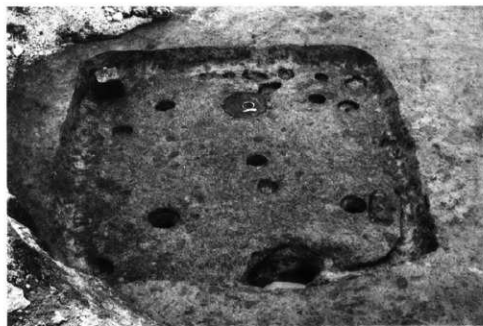
SB 13 (新)



SB 13 (旧)



SB 14



SB 15 (新)



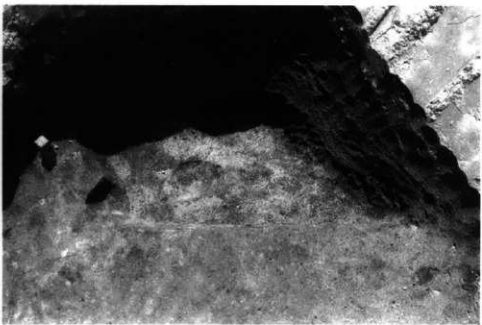
SB 15 (旧)



SB 16 (新)



SB 16 (旧)



SB 17



SB 18



SB 19



SK01断面



SK01



SD07



SD 10



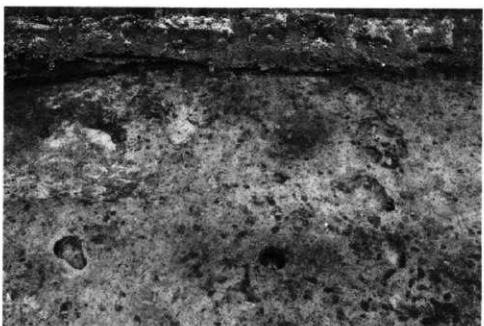
SD08



ST2



ST3



ST4



調査区 (西から)



調査区 (西から)



調査区全景



調査区全景



重機作業風景



調査風景



委託空中写真撮影



SB 10



SB 10



SB 10



SB 11



SB 13



SB 13



SB 13

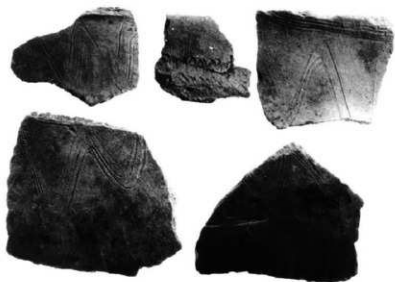


SB 13



SB 13

SB 13



SB 14





SB 13



SB 14



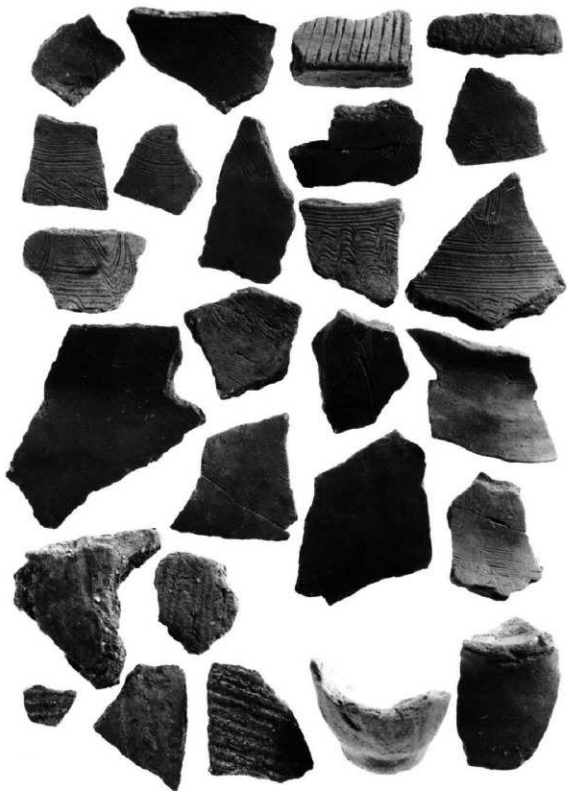
SB 15



SB 15



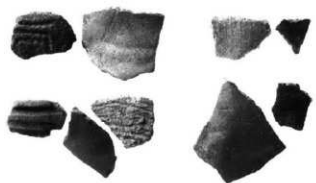
SB 16



SB 16



SB 18, 19



SD 出土



SK 01



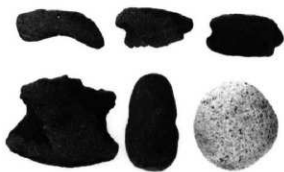
SB 10



SB 11



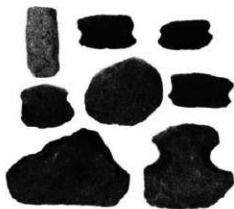
SB 13



SB 14



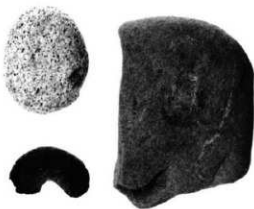
SB 15



SB 16



SD 11



SB 16



報告書抄録

ふりがな	やぶのこしいせき に							
書名	藪越遺跡Ⅱ							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	坂井 勇雄							
編集機関	飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL 0265-53-4545							
発行年月日	西暦2000年3月 15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やぶのこし 藪越遺跡	飯田市 上郷飯沼 3423-1他	2053		35度 30分 41秒	137度 51分 7秒	19980602 ～ 19980714	680	店舗建設
藪越遺跡	集落址	縄文時代 弥生時代	土坑 集石炉 竪穴住居址 掘立柱建物址 溝址	1基 1基 10軒 3棟 3条	縄文土器・石器 弥生土器・石器	弥生時代後期の集落の 一部を調査した。		

藪越遺跡Ⅱ

2000年3月

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145
長野県飯田市教育委員会

印刷 株式会社 ジャステック
クリエイティブセンター
